

アメリカ文学と神話批評(一)

福田 立明

二十世紀の神話・原型批評概観

神話という英語(“myth”)の語源はミュトス(*mythos*)にあるが、このギリシア語の語義は「ことば」または「話ことば」にほかならない。もうひとつの「ことば」ロゴス(*logos*)が「神」や「理」と結びついた理念的な言葉であるのに対し、ミュトスは情念や願望にかかわる呪術的な言葉である。アリストテレスの『詩学』によれば、ミュトスはロゴスを構成する諸単位の選択と、ありそうな再配列をなすことにある。つまり「神話」とは、「ものかたる」こと。ロラン・バルトの『神話作用』(一九五七年)が、伝達の体系とか意味作用の様式、と呼ぶものである(一三九頁)。眼前にない「行為や出来事を言葉による模倣」(フライ『同一性の寓話』一一六頁)で眼のまえにあらしめる、「再」現前させるので、物語る言葉はいくばくかは呪術性を帯びる。

たとえばギリシア語語源の比喩物語。水辺に咲くある

花が「水仙」としてあるためにはナルキッソスという名の呪われた男の事故死を物語るといふ呪術的手順を要した。新大陸の原住民と、渡来した白人植民者と、黒人奴隷の三者の血を受ける「メルティング・ポット」アメリカの創造になる新しい人間像が、世界の人びとに得心のいくようにあるためには、複数の「父」のあることを示唆する名を持つサム・ファザーズという混血者を物語る手続きを要するのである。

二十世紀はロマン主義文学伝統のプリミティヴィズム憧憬の記憶を残していたが、サー・ジェイムズ・フレイヤーの文化人類学、ジグムント・フロイトの精神分析学などを契機として、神話と神話学の隆盛期を迎える。文化人類学では、フレイヤーの『金枝篇』(一九〇七—一五年)はいうに及ばず、ジェシー・L・ウェストン『聖杯の探究』(一九一三年)、ルシアン・レヴィ・ブリエールやブロニスラウ・マリノウスキ、それに黒人奴隷の出身地の中心をなすアフリカ研究の成果としてメルヴィル・J・ハースコヴィッツ『ダホメー族の説話』(一九五八年)などを経て、クロード・レヴィ・ストロースの未開種族神話研究に基づく構造主義人類学が神話や文学の研究に影響を与えた。

もうひとつの関連学際的分野の精神分析学では、フロイトの『トーテムと禁忌』(一九二二—二三年)、カール・G・ユンク『変容の象徴』(一九二二年)、オットー・ランク『英雄誕生神話』(一九一四年)からゲザ・ローハイム『アニミズム、魔術、聖なる王』(一九三〇年)やエーリッヒ・ノイマン『意識の起源史』(一九七一年)などを経て、ジャック・ラカンの構造主義的精神分析学の貢献が著しい。神話研究では、これらの学際的領域と一部重なり合いつつ、今世紀初期のジェイン・エレン・ハリスンのギリシア神話祭式起源説、ギルバート・マリリーのギリシア叙事詩の研究から、ジョゼフ・キャンベル『千の顔を持つ英雄』(一九四九年)、カール・ケレーニイ『ギリシアとローマの宗教』(日本語訳書名『神話と古代宗教』、一九六二年)、ミルチャ・エリアーデの比較宗教学およびジョルジュ・デュメジルの印欧比較神話学の諸業績が積み重ねられていた。

これらの諸学説、ことに神話学領域ではハリスンやマリイの影響を受けて書かれることになる芸術理論哲学書、スザンヌ・K・ランガー著『感情と形式』(一九五三年)の序論的研究として刊行された『新様式の哲学』(一九四二年、邦訳書名『シンボルの哲学』)が、すくなくと

も四十年代のアメリカ国内の文学理論家たちに与えた影響は指摘しておかねばならない。あとで述べるリチャード・チェイスの神話体系研究書『神話の探究』(一九四九年)の最終章は「より広い観点」と題され、ここではランガーが神話に対してこれまでの哲学書にない大きな重要性を与えていることが賞賛されている。その上でチェイスは、ランガーを含めて象徴理論(著者の用語では意味論)哲学者たちも所詮、神話を評価するとはいえず、それは初歩的哲学としての神話という観点からにしか過ぎないと批判し(102)、この脈絡で「神話は夢に似ているかもしれないし、また哲学に似ているかもしれないが、それは芸術である。」(108)という重要な提言をおこなう。やや極端ない方になるうが、アメリカ文学研究における神話批評は、チェイスのこの命題に基づいてその有効性が保証されたといつてよいのかもしれない。

また実証性を原理とする学問分野でも、二十世紀最大の歴史書といわれる『歴史の研究』(一九三四—五四年)においてアーノルド・ジョゼフ・トインビーは、創造的な個性の神秘的法悦体験としてのエクスタシーを歴史の起動点として重視する。恍惚体験は当然のことながら日常的現実からの離脱を要するので、偉大な個人の現実か

らエクスタシーへの離脱と、靈的經驗を経る過程としてのエクスタシーから現実への再帰という波動を、文明の盛衰の波動的サイクルと平行に置いて論考する。この「引退と現実復帰」(“Withdrawal-and-Return”) (トインビー248-63) という学説上のモティーフもしくは参照枠に見られる波動性自体が宇宙の鼓動リズムと対応しており、すでに十分に神話的である。

歴史の波動学説という観点に立てば、十七世紀初頭の新大陸植民さえも、ノルマン王朝以来の封建制イングリンド時代という「引退」期からテューダー絶対制王朝確立による「現実復帰」の拡大エネルギー発散現象のひとつと解釈されえよう。歴史学では、当然のことながら上昇波である「現実復帰」の意義のほうが重要視されるから、新大陸を初め海外植民地への進出はエリザベス朝の隆盛のピークを記すものとして評価される。他方、文学においては、現実世界の事象が(再)解釈され、内面化されるだけの時間を必要とする。さらに神話形成は、現象的經驗をそれを経た個性なり文化全体なりに納得される哲学的意味づけを与えるような統御的イメージとして提示し、それを通して結果的に生の高揚感やこころの癒しを与える再体験をもたらすものであるから、その時期

が「引退」の歴史波動期にずれこむことがありうる。簡単にいえば、神話形成は「現実復帰」中の諸經驗を咀嚼消化し、つぎの上昇波動へと至る試練を生き延びるべく、語るにせよ書くにせよ、共同体もしくはその個人に受け容れられる「話」を作り出すことである。それは歴史家が重視する「昼」(現実)の作業ではなく、夢がそうであるように「夜」(引退)の作業である。この点では次章で見るように、二十世紀アメリカの神話への関心が世界大戦参戦と勝利という波動のピークからやや時を経て高まっていく事実に着目しておこう。

ただ文学研究における神話学的関心は、かならずしも総合的にまとめ上げられたそれら学際領域の成果を踏まえて現れるというわけではない。むしろいくつかの個々の事例が刺激になって、年代的にはかなり平行した形でその成果を援用するアプローチが試みられてきたように見える。

神話原型の二十世紀英米文学における実践的利用は、ジェイムズ・ジョイスの『ユリシイズ』(一九二二年)が表題の表すように、放浪者の家郷への帰還という神話的主題を小説の基底に据え、トーマス・スタンズ・エリオットの長編詩『荒地』(一九二二年)が上述のウエスト

ンのもうひとつの著作『祭祀からロマンスへ』（一九二〇年）を引喩源として持つという形で始まった。もともと古典主義からは遠く離れてあると思われる無定形のモダニズム文学に、最初から神話原型のはめこみがなされていたことは、驚くべきことといえよう。この小説の発表の翌年にエリオットがものした書評『「ユリシーズ」、秩序、神話』（一九二三年）では、ジョイスの記念碑的大作がギュスターヴ・フロベールとヘンリー・ジェイムズで終わつた小説という形式を、神話の利用、つまり現代と古代とのあいだにひとつの持続的平行を置くこと、により利用可能な方法にしたことが評価されている（エリオット483）。

それにしても、すぐれて現実模倣的なイギリス小説伝統の立場からは、この洞察さえもモダニズムの潮流の勢いを借りたひとつの強引なこじつけと見なされる恐れは充分にあった。六十年代からの回顧的論評ではあるが、フランク・カーモウドは小説理論研究書において、モダニストたちの神話への傾倒を、現実を排除した救済の虚構作りの一例で、未来のヴィジョンの源泉を現在でなく過去／伝統に求めたものだ、と指摘する。たしかにジョイスはギリシア・ローマの、またフォークナーはアポリ

ジニー／インディアンの「古代」に、それぞれ伝統と規範を求めた。イギリスという中心からすれば、周縁であるアイリッシュにもアメリカンにも民族の歴史的連続性のある伝統はなかつた、とはいえるかもしれない（カーモウド524）。しかし、それでは現代の現実模倣的なりアリズム小説は、より豊かな未来のヴィジョンを与えるフィクションとなりえたであろうか。答は、否である。もともとロマンス（伝奇物語）性の濃厚なアメリカ文学伝統においては、現実社会との関わりを重視するイギリスとは事情を異にしていると思われる。それがこの試みの根柢のひとつでもある。

アメリカ文学と神話・原型批評

とくにアメリカ文学の分野で神話批評への関心が二十世紀の前半期に高まつたのは、前節に見られるような欧米における神話一般に対する興味の高まりと対応するのはいうまでもないが、アメリカ独自の要素もいくつか考えられる。まずは歴史的な要素として、十九世紀末のフロンティアの消滅がある。内なる辺境の消滅は西漸運動のエネルギーのはけ口を外へ向ける契機となり、時あたかも対スペイン戦争（一八九八年）の勝利もあつて、ナ

シヨナリズムの意識が高揚していた。アメリカは、カリブ海域での支配権を強化すると同時に、ハワイ、フィリピンなど太平洋地域にも進出していた。これはほぼ一世紀前の対英戦争（一八一二—一四年）勝利後のナシヨナリズム高揚期を想起させるが、当時の国民感情を映したモンロー宣言（一八二三年）に発し、ジョン・オサリヴァンによつて表現を与えられた「マニフェスト・デステイニー」の理念は、百年足らずのうちにその適用範囲を新大陸から地球的規模へと拡大させたことになる。かつてはヨーロッパ君主国列強に対する防御の方策としての新・旧両大陸相互不干渉宣言であつたモンロー主義は、世界史における合衆国の存在意義の変化によつて矛盾をはらむものになつた。第一次世界大戦開戦時に発せられた中立宣言が、一九一七年同じウッドロウ・ウィルソン大統領によつて「聖戦」参戦へと変えられたとき、「名譽ある孤立」を求めたモンロー主義は終焉を迎える。アメリカは世界に対して、おのれのナシヨナル・アイデンティティを示さざるをえなくなるのである。

十九世紀の国民感情高揚期がアメリカ文学史上最初のアメリカニズムを意識化した文学潮流としての「アメリカン・ルネサンス」を招来させたように、二十世紀のそ

れはやはり文芸史家により「第二のルネサンス」（スピアラーソン）と名づけられる文芸隆盛期をもたらせた。第一のルネサンス期を代表するホーソン、メルヴィル、ホイットマンらが、いかにアメリカの文芸を世界の人びとに知らしめ、また第二のルネサンス期のフォークナーやヘミングウェイ、T・S・エリオットやウィリアム・カローロス・ウィリアムズなどの小説家、詩人が、いかにそれを世界文学の一線へと押し上げたかは、よく知られる事実である。私たちの関心からすれば、国籍離脱者となつた同世代詩人エリオットに対して、ニュージャーシー州小都市の医師／詩人として使命をまっとうしたウィリアムズが創作行為における土着性の有為を祈念するかのように編んだ随筆集『アメリカ氣質において』（一九二五年）を手にし、冒頭のコロンブスの新大陸発見神話を目にするとき、詩人のアメリカニズムへの愛着につよく触れる想いがするのである。

エリオット、ウィリアムズの二人の詩人に続き、南部「フュジティヴ・グループ」の詩人ジョン・クロウ・ラッサムは、彼の第一詩集『神についての詩』（一九一九年）の書名を彷彿させるかのように、宗教的思索の書『雷なき神』（一九三〇年）を上梓する。ここでは、ブネウマ（風／

息)としての聖霊を持つヘブライ・オリエンタリズムの「神」からロゴス(ことば)としての聖霊を持つオクシデンタリズムの「半神」キリストへ、さらには信仰対象の科学原理による置き換えへと、西欧精神の荒廃の歴史の由来がたどられる。これは、旧世界を遠く離れた最果ての地であるアメリカ南部のアグレリアニズム(農本主義)社会に西欧伝統文化の正当継承権を夢見ていた学者/詩人が、神なき荒地と化した大戦後のヨーロッパとアメリカ北部とは別天地に、強大で具象的な「雷を持つ神」いまします旧約的南部世界を祈念した奇書といえないであろうか(ランサム、とくに327-28)。

凄惨な大戦の地獄を「見」てしまった詩人の想像力によって、本当に存在する神とは人を慰めてくれる神ではなく、「恐ろしい、何をすることも予知できぬ、宥め難い」存在であり、その御業はしばしば人間に受難をもたらすものでなければならなかった(Gods)。このような神概念によって、本書は前世紀のなかば、『モオビイ・ディック——白鯨』(二八五一年)執筆当時のハーマン・メルヴィルの意識を映し出す鏡のような本となった。旧世界の信仰者の十七世紀における避難所であり約束の地であったアメリカ北部、ニューイングランドが、科学技術と資本

主義工業化という「邪神」崇拜によってソドムの都と化し、南部農園社会にも産業化の波が迫りきたとき、その大波からの「亡命者」^{フエニチエイヴ}グループの師としてのランサムは、いにしえの楽園追放神話の演出者たる「怒れる神」の支配する最後の「エデンの園」をそこに呼び戻そうとしたのである。

祈求されたのが旧約的神格であったのは、かならずしも農本主義的キリスト教信者の信仰上の限界とばかりはいえない。新大陸の広大な空間的広がりや渡来者住民の意識を文明的に「未開化」する例は、ジェイムズ・フエニモア・クーパーのフロンティア小説はもとより、ラルフ・ウォルドロー・エマソンの「大霊」の神概念などにも跡づけることができようが、もしもランサムがキリスト教徒でなければ、どのような「原始的」神格を喚起しようとしたかを想像するのは興味深いことである。

こうして「第二のルネサンス」が極点に達する一九三〇年代以降、文学理論/批評分野では、モウド・ボドキン『詩における原型的パターン』(一九三四年)をはじめ、その後ケネス・バーク、W・H・オーデン、ハリール・レヴィン、フィリップ・ウィールライト、スタンリー・エドガー・ハイマン、フランシス・ファーンガソン、マーク・

シヨラー、ノースロップ・フライなどが、さまざまな色合いにおいてこの領域に関わる優れた論考を著してきた。この過程で文学における「神話」は、神々の物語という狭義の定義から、人間の意識下に系統発生的に蓄えられてきた生得的イメージ群としての原型の発現として、あるいは「文学形式の構造上の組織原理」(フライ)『批評の解剖』(註)と、いうように意味範囲を拡大していく。その論考対象は、当然のことながらロマンス性と宇宙論的な問題をほらむシェイクスピアやミルトン、ウィリアム・ブレイクやサミュエル・テイラー・コウルリッジなどイギリス文学、しかもジャンル別では詩や詩劇のテクストに集中する感があった。

ここで二十世紀におけるアメリカ文学史観としては、十九世紀後半以降のリアリズム／ナチュラリズムの文学伝統を説明するのに適した生物進化論や弁証法的唯物論に基づき、イポリト・テーヌの文学史観のもとに書かれたヴァーノン・L・パリントンの大著『アメリカ思想の主潮』(一九二七—三〇年)の影響力が大きく、ヴィクター・フランシス・カルヴァートンやグランヴィル・ヒックスら、いわゆる「進歩主義」批評家の論調が三十年代までの主調音であった事実を思い起こしておく必要があ

ろう。その対極にはハーヴァードやプリンストンのいわゆる「保守主義」学者／批評家があり、両者はともに思潮的にはユニヴァーサルイズム、そして論調上は決定論的であった。両者のあいだを縫ってアメリカ文学テクストをアメリカ文化のコンテクストで読もうとする動きは、第二次大戦とその後のナシヨナリズムの波動に乗ったアメリカニズムの台頭によって本格化したように見える。

文学史的にはその時期は文学教育の大衆化を背景とするニュー・クリティシズムの時期とほぼ重なり合い、その主導者のクリアンス・ブルックスやアレン・テイトなどにも神話批評への関心が認められるのは、不思議ではないといえよう。それはまえばに見たように、文化人類学や精神分析学など関連領域の成果により、文学的デイスコースに見られる比喩、象徴、イメージを深層で支える原型、祭式、神話への関心が深まっていたせいもある。フロイト理論とマルキシズムという先端思想を取り入れてモダニズム文学批評を確立していたエドモンド・ウィルソンらの既成批評家に対抗すべく、四十歳代のライオネル・トリリングが、エゴ心理学を核とするポスト・フロイト主義と偏りのない想像力を唱導する『リベラル・イマジネーション』(一九六四年)取載の諸論考を発表し

たのはすでに四十年代のことであり、そのもとに次節で述べるリチャード・チェイスらのニュー・リベラリストと呼ばれることになる批評家たちを輩出させるきつかけをなしたのである。

この年代には大戦と勝利という国民意識高揚のなかで、アメリカ文学伝統を見据える動きが一気に加速される。『アメリカン・ルネサンス』（一九四一年）を著したF・O・マシセンは、一世紀前の国民文学興隆期をアメリカ文化の「文芸復興期」として論じ、翌年『アメリカの地に立ちて』（一九四二年）を発表したアルフレッド・ケイジンは、十九世紀後半に始まるアメリカ現代散文学をリアリズム国民文学伝統として称揚する。ヘンリー・ナッシュ・スミスの『処女地』（一九五〇年）とR・W・ルイスの『アメリカのアダム』（一九五五年）によって、アメリカの国土が「世界の庭」として、アメリカ人が「新しいアダム」として、それぞれ神話的原型をもって表象されるのは、それからわずか十年余りのことに過ぎなかった。

ことにアメリカでもイギリス古典文学に劣らぬスケールを持つ『白鯨』の作者メルヴィルについては、これもなかば伝説的ではあるが、レイモンド・M・ウィーヴァー

『ハーマン・メルヴィル——船乗りにして神秘主義者』（一九二一年）出版を契機とし、つとに二十年代から「神秘主義」作家として再評価が始まっていたから、その研究分野で神話批評の主な数例を挙げるだけでも、チャールス・オルスン『イッシュメールと呼んでくれ』（一九四七年）、ロウランス・トンプソン『メルヴィルの神々との口論』（一九五二年）、ドロシー・フィンクルスタイン『メルヴィルのオリエンダ』（一九六一年）、H・ブルース・フランクリン『神々の跡／＼通夜——メルヴィルの神話学』（一九六三年）などの成果が見られる。のちにはこの批評方法論に反発したかのように見えるリチャード・チェイスも、すぐれたメルヴィル論（一九四九年）を著す四十年代にはその主要な唱導者のひとりであり、この年にはさきに触れた『神話の探求』を上梓して、アメリカ文学界における神話批評の理論的根柢を与えている。

トリリンググにつづきニュー・リベラリストと呼ばれたチェイスら若い同世代のなかでは、レズリー・A・フィードラーが『消えゆくアメリカ人』（一九六八年）で深層分析的手法による文学的文化人類学を目指し、フィリップ・ヤングが神話批評の精華を示す優れた「リップ・ヴァン・ウィンクル」論（一九六〇年）とポカホンタスの論

考（一九六二年）を『三つの靴を満たして』（一九七三年）に、進行中の「古典アメリカ神話研究」（ヤングマン）の二例として収録している。その批評の流れは、ピューリタン予型論を援用し、アメリカの発展を聖書の予言と世俗的事件との弁証法からなる救済史として論考するサクヴァン・バーコヴィッチの『アメリカのエレミアの嘆き』（一九七八年）や、エジプト象形文字の解説がアメリカ・ルネサンス期の文学に与えた影響を論じるジョン・T・アーウィンの『アメリカの秘密文字——アメリカン・ルネサンスにおけるエジプト象形文字の象徴』（一九八〇年）へとつながり、さらには八十年代以降のニュー・ヒストリシズムの流れへと流入していくとみなすこともできるであろう。

これらのニュー・リベラリストたちが、アメリカ自国の文学テクストのなかにたんに古代的な、つまりは異国の神話ばかりではなく「アメリカの神話」を求めたのは、このような時代思潮があったからである。いづれの神話批評の核心にも、文化的コンテクストのなかでのアメリカ再読の試みがあった。そういう意味で、これらのニュー・リベラリストたちは、優れたアメリカニストでもあったのである。

リチャード・チェイス——生き残りのための神話

アメリカの文芸批評家として初めて組織だった神話の歴史学的研究成果を「神話の探求」（一九四九年）で発表したリチャード・チェイス（一九一四—六二年）は、この業績自体で最高の神話批評家の地位を確立したといつてよいが、短命な俊才の最後の著作『アメリカ小説とその伝統』（一九五七年）の巻末にわざわざ「ロマンス、民衆的想像力、および神話批評」と題する「付記II」をつけてまでして、自分は「神話批評家」(a "myth critic")²¹（重引用符著者）ではないと断っている（244）。これは当時狭い意味での「いわゆる神話批評家」たちが、いかに流行の波に乗り、文学界に影響力を振るっていたかを間接的にうかがう資料になる。そこでも指摘されるように、彼らが唯一信奉する「神の死と再生」という単一の神話に基づき、多様な文学テクストをそのアメリカ的神話原型の形式である「無垢からの墮落と人生への導入」という魂の軌跡に還元し去ることは、神話形成の多元性と、それになによりも自由な想像力の羽ばたきを重要視したこの批評家には耐えられぬことだったにちがいない。アメリカニストの彼にとつて、アメリカ文学とは、同化する

ることも、両立させることも、また超越することもできない解決不能の矛盾状況にある人間の生を描くものだったのである(214)。

現時点から振りかえれば、そこにはあらずもがなの恨みがないでもない。チェイスがいわゆる「神話批評家」であることを否定していたのとはほぼ時を同じくして、フランスでは「神話とはことばであり、話すことに属するものならずすべてが神話でありうる」とするロラン・バルトの定言がなされ(二四〇頁)、批評用語として広く受け容れ始められようとしていた。フランスのポストモダニストにとって、神話とは表現の対象(内容)によってではなく、表現の仕方(形式)によって定義づけられるものである。歴史家の手によって現実的なものがことばの状態に移し変えられ(バルト一四〇頁)、行為がことばで模倣される(『同一性の寓話』七五頁)。このとき歴史家にはそのことばに対応する見本が現実の時空領域に必要である。詩人・作家も同様な言説行為を行うが、言語的模倣のための現実界の見本を必ずしも必要とはしない。外的見本なき表現行為にかかわる文学的想像力は、歴史的記述が要する見本の代わりに、ノースロップ・フライのいうイメージのパターン(『同一性の寓話』一九頁)とか、

粹組(同七四頁)といったものを必要とする。文学が個々の特殊なものを言語模倣する歴史と対照的に、普遍的で反復的なものを模倣しようとするところに、特異な表現の仕方を生じさせる。その言説形式が神話の形式なのである。

もちろんこのことにチェイスが気づかなかったわけではない。ただ彼が批評家として自国の文学に対し始めた三十年代を支配していた思潮が、圧倒的に十九世紀後期からの自然主義・リアリズム文学伝統であった事実を斟酌した上で、とりわけ『アメリカ小説とその伝統』というような文学史的記述を含む書物を著すにあたり、狭義の神話批評的アプローチがよく機能しない作品群がその「伝統」の主流にあることを思い知るに至ったとしても、なにも不思議はない。神話的要素が比較的薄弱な当時の文学伝統のなかで、実はむしろ神話性が濃厚なロマンス、ないしはロマンス小説が自国文学伝統の主流にあることを主張する書を著すことは、「神話批評家」たることを否定する神話批評家によってのみなされうるというパラドックスを読みとる必要があるだろう。

その認識の上に立って、彼の詩人論(『エミリー・ディキンソン』一九五一年、『ウォルト・ホイットマン再考』

一九五五年)に先立ち発表された『ハーマン・メルヴィル——批評的研究』(一九四九年)をひもとくと、すでに「はじめに」において、二、三十年代の文学批評思潮の否定によって新たな地平を切り拓こうとする気概と、それとともにその微妙な立場をも読みとることができるとうな気がする。その書がまずメルヴィルの作品を「不完全な偉業」として示すことにあるとした上で、文化上の破滅に瀕した二十世紀の暗黒の中心にあつて、三十年代の失敗と敗北から自由を取り戻そうとするあたらしい自由主義リベラリズムに資することが第二の目的であると宣言される(vii)。

このニュー・リベラリズムは、たえず想像力を駆使する批評行為によつて、旧来の誤信を避け得るような生のヴィジョンを示さねばならないが、ここで古き誤りとして挙げられるものこそ、安易な進歩思想、「社会的リアリズム」(原書二重引用符)や社会参加のプロレタリア文学観である。歴史的現実を単なる経済的、倫理的価値の問題とするリアリズム文学観が退けられる一方で、願望充足的な美辞麗句への耽溺が批判されるところに、第二次大戦後の自由(資本)主義陣営代表国アメリカの「健全な」保守主義思想としてのアメリカニズムを読み取るこ

とができるのかもしれない。チェイスはこのみづからの二十世紀中葉の暗黒の状況すべてをちやうど百年前のメルヴィルが直面したものとして移し替え、彼の作品をいま自分たちがなさねばならない継続的な想像力による批評行為の産物として読み解こうとする。ニュー・リベラリズムが生き延びようとする意志を持つのなら、それはまたハーマン・メルヴィルと折り合いをつけなければならぬといふ(viii)。

チェイスの歴史意識に基づく人間観は、西欧的人間をユダヤ・キリスト教伝統とギリシア伝統の二重の文化伝統継承者と見ることから出発する。メルヴィルが創造した二種類の基本的なヒーロー像は、したがってひとりはいシユメールであり、もうひとりはいシユメールである(『メルヴィル』9)。しかし理想的なヒーローとは、「人間解放のため古い反動的な神々と闘い、人間に彼の創造的知性を与える若きプロメテウスの革命家」にとどまるものではない。真の英雄とは、過ちをも犯す人間の道徳的責任を認め、人間の罪と高貴さを十分に認めた上で、その父も母も子をも抱擁することができ、それによつて自己を豊かな知恵と愛において形成された文化の象徴にするものである(9)。真の英雄像は、したがつてこのブ

ロメテウスとオイディプスというふたつの神話原型像を兼ね備えた者でなければならぬ。オイディプスになる状態にある真のプロテウスは「ハンサム・セイラー（立派な水夫）」と呼ばれ、生の心理的、文化的持続を拒む者である偽りのプロメテウスと区別される(37)。

かくしてチェイスによる作中人物の最初の神話原型の分類リストにおいて「真のヒーロー」として求められるのは、生き延び、甦ることのできるハンサム・セイラーである。しかしながら完全にプロメテウス・オイディプス的人物類型としてのハンサム・セイラーは、文学テクストにあつては当然のことながら、『ホワイト・ジャケツト』（二八五〇年）のジャック・チェイスや『白鯨』（一九五一年）のバルキンソンとして脇役に登場するにすぎない。メルヴィルの近代懐疑主義的ペシミズムとチェイスのニュー・リベラリズムの神話原型批評が共有するヴェクトルは、後者の前者に対する「不完全な偉業」という評言が暗示するように、意外に小さいものだったのかもしれない。二十世紀中葉の合衆国・ソヴィエト連邦間核戦争の脅威のさなかにあつたニュー・リベラリストの危機感が一世紀前のメルヴィルが直面した歴史状況に移し換えられるとき、『白鯨』の船長エイハブは、「生の

当然の曖昧さを棄て、絶対的で、犯すべからざるものを求めるあまりおのればかりか仲間をも究極の破局へと巻き込んでしまふ精神的欺瞞にとりつかれた」(38) 偽りのプロメテウスとして断罪されなければならない。彼はまた、私的な試練を経るためにおのれを社会から断絶し、神を侮辱する原始的魔法使い／シャーマンであり(39)、同時にアメリカ資本主義企業家の叙事詩的変形でもある(40)。メルヴィルが怖れた、無謀な企てに走り去勢的な罰を被るアメリカ的性格を、チェイスは二十世紀の政治的冷戦構造に合わせて読み取らねばならなかったのである。

もとよりメルヴィルにもっとも近い神話の原型は、イシメールなる文学的ペルソナにある。チェイスによれば、他の作中ヒーローたちはみな、たえず「アメリカ人（“American Man”）」たるイシメールが発する「アメリカ人とは何者なのか、何になるのか」という疑問に対する一連の解答として読み取られねばならない。イシメールは彼らのなかに、おのれの父性を、おのれと社会との、さらには「自然」の秩序と力との神秘的繋がりを探し求めるのだという。それが私たちに明かすのは、メルヴィルの根元的な関心が哲学的諸問題よりも、個性と

文化にあつたといふこと(278)。だからこそ、チェイスと同様に当時の進歩主義原理にとらわれず、テクスト／構造分析に当たろうとする隆盛期のニュー・クリティシズムに好意感を抱きながらも、結果的にはノースロップ・フライなどの体系的神話原型批評を通してこの新批評の息の根を止めることになる批評方法の側に立ったのである。新批評は私たちに「語／福音」を与え、メルヴィル批評の「新約聖書」を形成してくれるかもしれない。しかし、とチェイスはいふ。「私はすべてを考慮した上で、『旧約』の側に残り、人間と芸術家に、彼の作品、偶像、神話、神々、法、歴史、予言とモラルに、関心を抱く」(註-xiii)。このようにアメリカ文学神話批評における初期の本格的実践批評の試みのひとつは、危機の時代にあつて人間存在とその創造行為(文化)の持続と全体性を希求してやまなかつたひとりの早世した批評家によつて、苦渋に満ちた選択的試行としてなされたのである。

参考文献

文献の引証は本文中に括弧で著者名または書名略号と頁数(和書・日本語訳書は漢数字)により示した。

- Aristotle. *Aristotle's Poetics*. Trans. Leon Golden. Englewood Cliffs, N. J.: Prentice Hall, 1968.
- Barthes, Roland. *Mythologie*. Paris: Seuil, 1957. 篠沢秀夫訳『神話作用』 現代思潮社 一九六七年。
- Bercovitch, Sacvan. *The American Jeremiad*. Madison: U of Wisconsin P, 1978.
- Bodkin, Maud. *Archetypal Patterns of Poetry*. Oxford: UP, 1934.
- Brooks, Cleanth. *The Well Wrought Urn: Studies in the Structure of Poetry*. New York: Harcourt, Brace, 1956.
- Burke, Kenneth. *A Grammar of Motives*. Berkeley: U of California P, 1969.
- Campbell, Joseph. *The Hero with a Thousand Faces*. 1947. New York: Meridian, 1956.
- Chase, Richard. *Quest for Myth*. 1949. New York: Greenwood Press, 1969.
- . *Herman Melville: A critical Essay*. New York: Macmillan, 1949.
- . *The American Novel and Its Tradition*. Garden City, N. Y.: Doubleday Anchor Books, 1957.
- Cooper, James Fenimore. *The Prairie: A Tale*. 1827. Albany: State U of New York P, 1985.
- Emerson, Ralph Waldo. *The Selected Works*. Ed. Brooks Atkins. New York: Modern Library, c. 1950.
- Faulkner, William C. *Go Down, Moses*. 1942. New

- York: Modern Library-Random House, n.d.
- Fergusson, Francis. *The Idea of a Theater*. Princeton: Princeton UP, 1949.
- Fiedler, Leslie A. *Love and Death in the American Novel*. Revised Edition. 1966. New York: Dell, 1967.
- . *The Return of the Vanishing American*. New York: Stein and Day, 1968.
- Finklestein, Dorothee M. *Melville's Orienda*. New York: Octagon, 1970.
- Franklin, H. Bruce. *The Wake of the God: Melville's Mythology*. Stanford, Calif.: Stanford UP, 1963.
- Frye, Northrop. *Anatomy of Criticism: Four Essays*. 1957. New York: Atheneum, 1965.
- . *Fables of Identity: Studies in Poetic Mythology*. New York: Harcourt, Brace, Jovanovich, 1963.
- 駒澤大学エ・ソシオ学研究会編『同一性の寓話——詩的神話学の研究』法政大学出版局 一九八三年。
- Grimar, Pierre. *La Mythologie Grecque*. Paris: Collection Que Sais-Je? n.d. 高橋善繁訳『ギリソク神話』白水社 一九五六年。
- Guerin, Wilfred L. et al., eds. *A Handbook of Critical Approaches to Literature*. New York: Harper & Row, 1979.
- Harrison, Jane. *Prolegomena to the Study of Greek Religion*. Cambridge: Cambridge UP, 1921.
- Hyman, Stanley Edgar. *The Tangled Bank*. New York: Atheneum, 1962.
- Irving, Washington. *The Sketch-Book of Geoffrey Crayon, Gent.* 1819-20. Ed. Susan Manning. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Irwin, John T. *American Hieroglyphics: The Symbol of Egyptian Hieroglyphics in the American Renaissance*. 1980. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1983.
- Joyce, James. *Ulysses*. 1922. London: Bodley Head, 1960.
- Jung, Carl G. *Symbols of Transformation*. 1952. Trans. R. F. C. Hull. *The Basic Writings of C. G. Jung*. Ed. Violet Stauv de Laszlo. New York: Modern Library-Random House, 1959. 同(2) 韓国版は 著(1) 日本語訳『ユングの象徴』筑摩書房 一九八五年。
- Kazin, Alfred. *On Native Ground: An Interpretation of Modern Prose Literature*. New York: Harcourt, Brace, 1942.
- Kernode, Frank. *The Sense of an Ending: Studies in the Theory of Fiction*. Oxford: Oxford UP, 1966.
- Langer, Susanne K. *Philosophy in a New Key: A Study in the Symbolism of Reason, Rite, and Art*. 1942. New York: Mentor, 1952.
- Levi-Bruhl, Lucian. *Primitive Mentality*. Trans. Lilian Clare. London: George Allen & Unwin, 1923.
- Levin, Harry. *The Power of Blackness: Hawthorne, Poe,*

- Melville, New York: Knopf, 1958.
- Lewis, R. W. B. *The American Adam: Innocence, Tragedy and Tradition in the Nineteenth Century*. 1955. Chicago and London: Phoenix-U of Chicago P, 1958.
- Littleton, C. Scott. *The New Comparative Mythology: An Anthropological Assessment of the Theories of Georges Dumézil*. Revised Edition. Berkeley: U of California P, 1973. 本書第三版増補部分を併記し藤田昌久 野兼道 千規『新比較神話学——トランスナル理論の人類学的方法』を参考書として一九八一年。
- Mathiessen, F. O. *American Renaissance*. New York: Oxford UP, 1941.
- Melville, Herman. *White-Jacket; or, The World in a Man-of-War*. 1851. Evanston and Chicago, Northwestern UP and Newberry Library, 1969.
- . *Moby-Dick, or, The Whale*. 1851. New York: Hendricks House, 1952.
- . *Pierre; or, The Ambiguities*. 1852. New York: Grove Press, 1957.
- . *Israel Potter; or His Fifty Years of Exile*. 1855. London: Constable, 1923.
- . *Billy Budd, Sailor: An Inside Narrative*. 1891. Chicago and London: U of Chicago P, 1962.
- Murry, Gilbert. *The Classical Tradition in Poetry*. Cambridge: Harvard UP, 1927.
- Murry, Henry A., ed. *Myth and Mythmaking*. 1960. Boston: Beacon Press, 1968.
- Olson, Charles. *Call Me Ishmael: A Study of Melville*. 1947. San Francisco: City Lights Books, 1958.
- Parrington, Vernon L. *Main Currents in American Thought*. 1927-30. New York: Harcourt, Brace, c. 1930
- Smith, Henry Nash. *Virgin Land: The American West as Symbol and Myth*. 1950. New York: Vintage -Random House, n.d.
- Spiller, Robert E. *The Cycle of American Literature: An Essay in Historical Criticism*. New York: Macmillan, 1955.
- Tate, Allen. *Forlorn Demon*. New York: Ayer, 1977.
- Thompson, Lawrence. *Melville's Quarrel with God*. Princeton: Princeton UP, 1952.
- Townbe, Arnold J. *A Study of History*. Vol. III. New York: Galaxy-Oxford UP, 1962.
- Trilling, Lionel. *The Liberal Imagination: Essays on Literature and Society*. 1964. New York: Harcourt, Brace, 1979.
- Vickery, John B., ed. *Myth and the Literature: Contemporary Theory and Practice*. Lincoln, Neb.: U of Nebraska P, 1966.
- Weaver, Raymond M. *Herman Melville: Mariner and Mystic*. 1921. New York: Cooper Square Publishers,

1968.
Weston, Jessie L. *The Quest of the Holy Grail*. 1913.
New York: Gordon P, 1972.
---. *From Ritual to Romance*. Cambridge: Cambridge
UP, 1920.
Wheelwright, Philip. *The Burning Fountain*. Bloom-
ington: Indiana UP, 1954.
Williams, William Carlos. *In the American Grain*. 1925.
London: MacGibbon & Kee, 1966.
Young, Philip. "Fallen from Time: The Mythic Rip Van
Winkle." *Keryon Review* os 22.4 (1960): 547-73.
---. "The Mother of Us All: Pocahontas." *Keryon
Review* os 24.3 (1962): 391-415.
---. *Three Bags Full: Essays in American Fiction*. New
York: Harcourt, Brace, Jovanovich, 1973.
巽 孝之 『ニュー・アメリカニズム——米文学思想史の物語
学』 青土社 一九九五年。